

三学年だより

令和3年 7月21日 (水)

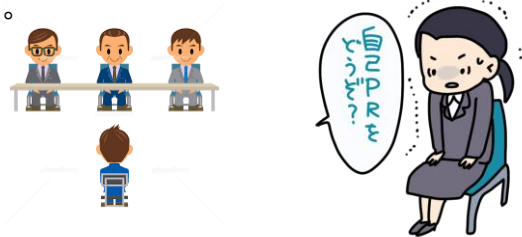
第5号

「正念場」

真価を表すべき最も大事な
ところ
ここぞという大切な場面

3年の1学期が終わりました。皆さんにとって、「正念場」の夏休みがやってきました。就職希望者にとっては、応募先の決定や応募書類の作成、面接指導など待ったなしです。進学希望者も、出願条件の確認はもちろんですが、いつまでに何が必要かは出願先によって違います。家の方と募集要項を一緒に読んで、確認しましょう。特に、学費を含めた進学に関わる費用は、額がとても大きいので、家の方としっかり確認することが必要です。3年生の皆さんにとって高校生活最後の夏休みを、進路実現に向けた「充実した」夏休みにしてください。

とはいえ、普段通りの夏季課題もあります。夏休みは、じっくりと学習に取り組むことのできる貴重な時間です。教養や常識は一朝一夕には身につきません。常に学びへの意識を持つことが必要です。ということで、今回は、高校生活最後の夏休みを迎える皆さんへ、8月が来るたびに「平和」の尊さを再確認してほしいという願いを込めた新聞記事を、裏面に紹介しておきます。



◎夏休み中の主な予定

日	予定
7/26(月)	就職ガイダンス 10:00~16:00 (就職希望者のみ参加)
8/4(水)	就職希望者「保護者同意書」×切
8/5(木)	就職希望者登校 13:00
8/11(水)~8/17(火)	学校閉庁日 (<u>学校に入ることができません</u>)
8/20(金)	就職希望者「応募書類」×切
8/23(月)	進学希望者「学校推薦型選抜利用申請書」提出×切
8/26(木)	始業式

◎8/26(木) 始業式の日程

SHR	8:30～ 8:35
大清掃	8:40～ 9:00
始業式・頭髪服装検査	9:10～10:00
LHR	10:10～10:30
3限 課題テスト準備	10:40～11:30
4限 課題テスト(国語)	11:40～12:30
5限 課題テスト(英語)	13:15～14:05
6限 総合探究	14:15～15:05



“総合探究の夏休み課題を忘れずに”

◎保護者の皆様へ

①自動車免許取得について

4月からの新生活に備え自動車免許の取得を考え
ておられるご家庭もあろうかと思えます。本校で
は、学業優先という理由から自動車学校への入校
は2学期期末考査終了日(12/7)以降から認めて
おります。入校にあたり、本校生徒指導部への申請
も必要となりますのでお忘れないうお願いします。
繰り返しになりますが、入校期日は必ずお守りください。



②コロナウイルス感染症について

各自治体でのワクチン接種もすすんでおりますが、引き続き感染予防に努めて
ください。なお、「濃厚接触者になってしまった」、「PCR検査により陽性が判明
した」などの場合、お手数ですが学校へのご連絡を必ずお願いいたします。

◎今月の新聞記事…裏にあります

8月6日、9日は日本にとってどんな日でしょうか？
皆さん日々忙しいかと思いますが、少し休んで考え
てみましょう。



おさき とうめい 小崎 登明さん

4月15日、93歳で死去

長崎原爆で唯一の肉親だった母親を失い、原子野をさまよう中で直面したのは、他人を見捨て、仇敵を許せなかった自らの「罪」。人間の弱さと孤独に向き合い、信仰と共に生きた。多くの出会いに導かれ、最期まで自らの言葉で語り続けた修道士だった。

1945年8月9日、三菱長崎兵器製作所で働いていた17歳の時、爆心地から2・3キロの工場で被爆。その直後、以前暴力を振るわれた瀕死の同僚に出くわし「さままみろ」と吐き捨てた。助けを求める他の人たちも、振り切って逃げた。

弱さ、孤独 包み隠さず

戦後、孤児として長崎市の聖母の騎士修道院に身を寄せ、修道士に救われた。2009年からは日

創設者、マキシミリアノ・コルベ神父の存在。ナチス・ドイツによるユダヤ人大量虐殺の場となったアウシュビッツ強制収容所で収容者の身代わりになり殺害された生き方に感銘を受け、その足跡をたどった。

神父に助けられた生存者と交流を重ね「戦争や原爆、収容所の悲劇が繰り返されないように」と誓い合った。「平和の原点は人の痛みを分かる心を持つこと」。出会いを背中を押され、94年か

ら原爆の語り部として赤裸々に体験を語り続けた。

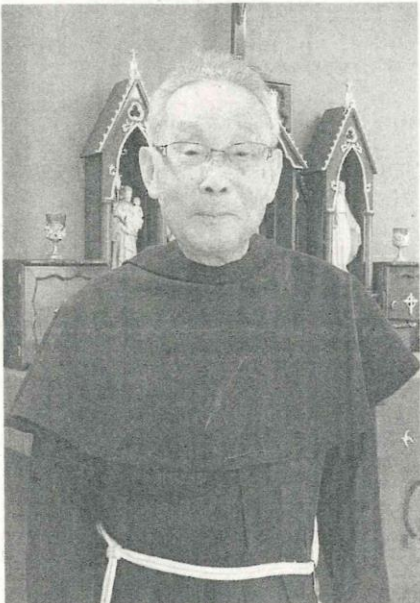
2009年からは日々、ブログを執筆。日常や思い出、心境をユーモラスにつづる姿は多くの人を引き付け、縁や交流が広がった。

今年1月にかんを公表した。「人間とは悲しい存在」。2月、長崎平和推進協会の職員に向けた最後の講話では、こう語ったという。

「もう、チカラが無い。ブログは亡くなる日の朝まで更新。修道院の神父や親友らに見守られ、穏やかに逝った。自らの弱さを見つめ続け、逃げなかつた彼の周囲には、いつも支える多くの人たちの姿があった。

(共同通信・塚本友里江)

写真：修道院が発行する月刊誌の編集長も長年務めた小崎登明さん。取材したコルベ神父の資料は、遠藤周作の小説「女の一生 二部作」の「サチ子の場合」にも生かされた



*この記事と関連して、小崎さんが被爆時に経験した生々しい記憶や信仰の道に生きる決意に至るまでの話などは、インターネット上でも詳しく知ることができます。

参考：「朝日新聞の紙面から 広島・長崎の記憶～被爆者からのメッセージより（ナガサキノート 原爆の年のクリスマス）など」